

スキマタイムズ

もっとお互いを理解するための場や時間を

日本自立生活センター自立支援事業所 2012年6月29日発行 第15号

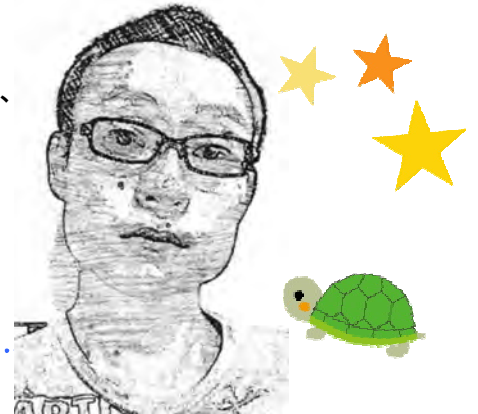
職員紹介

職員自己紹介

- ① 古川 大輔 (ふるかわ だいすけ)
- ② 2003年に介助者として

- ①なまえ ②JCILとの関わりはいつから？
- ③きっかけは？ ④どんな仕事をしていますか？
- ⑤ A:大切にしていること B:これからしたいこと

- ③ 大学時代、東京の自立生活センターで働いていました。
大阪に引っ越してきたときに自立生活センターで働きたいと思い、
京阪沿線に事務所のある(当時)JCILに電話したのがきっかけ。
- ④ 事務全般(主に会計業務)
A:バランス感
B:これもしたい、あれもしなくては、と忙しく日々を過ごす。
そして、たまにゆったり自然を全身に感じていたい。



- ① 廣川 淳平 (ひろかわ じゅんぺい)
- ② 2004年...23才の春
- ③ 高校からの友達だった橋村さんにさそわれて。
- ④ コーディネータとして、派遣調整の仕事をしています。
障害児の居場所事業のILクラブの仕事もしています。
- ⑤ 「男だから」とか「女だから」とか「若いから」とか、そういう
ような語り口で人を見ないようにしたいと思っています。

- ① 渡邊 琢 (わたなべ たく)
- ② 2000年の秋～冬
- ③ 貧乏学生だったので、いいバイトを探してた。
段原さんたちのサークルを通じてJCILを知った。
- ④ ・障害者自立生活運動がライフワークとなっています。
本体のメンバーと一緒に活動してます。
・コーディネートをやっています。いろんな人としゃべってます。
- ⑤ ・本体活動の継続・発展
・ピープルファーストの発展
・介助者という生き方の模索



ラテックスアレルギーをご存知ですか？



ラテックスアレルギーとは、皮膚が天然ゴム製品に接触することによって蕁麻疹(じんましん)などのアレルギー症状がおこる病気のことです。

症状がひどい場合は血圧低下やショック状態に陥ることもあるので注意が必要です。

ラテックスとは、天然のゴム製品の原料となるゴムの木の樹液のことで、ラテックスアレルギーは、ゴム製品に含まれているゴムの木のたんぱく質が原因となります。アトピー性皮膚炎や食品に対するアレルギーがある場合は特に気をつけてほしいです。

ラテックスアレルギーを予防するためには、天然ゴムの製品はできるだけ避け、代わりに合成ゴム製品を使う事が大切です。介助でよく使うゴム手袋は合成ゴムの原料でパウダーのついていないタイプを選ぶと良いでしょう。

※ 現在、天然ゴムの手袋を使用している場合は、すぐに使用を中止する必要はありません。買い替える際の参考にしていただけたいと思います。

居場所づくり勉強会第16弾報告「成年後見人ってなんだろう？」

おそらく誰でも一度は耳にしたことがある成年後見人、あるいは成年後見人制度という言葉。しかし、説明を求められると言葉に詰まってしまうのは私だけではないはずです。5月22日に開かれた勉強会ではそんな成年後見制度を弁護士の舟木浩先生に分かりやすく解説していただきました。

成年後見制度の日本での始まりは明治時代であり、禁治産・準禁治産制度と制度名も違っていた。制度の対象者に聾者や啞者、盲者が加えられていたこと(1979年に削除)、配偶者がいる人は必ず配偶者が後見人・保佐人になる配偶者法定後見、後見人は一人でなければいけない単独後見、公的介入の限界等様々な問題がありました。しかし、一番大きな問題は、後見人や保佐人一人に対して強い権限を与えてしまい、対象者の自己決定を軽視してしまうことです。

現行の成年後見制度は、対象者本人の自己決定を最大限尊重するとしています。その仕組みとして、まず本人の判断能力がある間に後見人を選んでおくことができる任意後見があります。そして、もし判断能力が不十分な状態になってから裁判所が選任する法定後見でも日用品の購入やそのほかの日常生活に関する行為の自己決定が認められています。その他、前の制度で問題であった配偶者法定後見の廃止や複数人を後見人として選ぶ複数後見、法人を後見人として選ぶ法人後見も可能になったので、後見人の負担を軽くする他、不正の予防や早期発見につながることも期待されています。

今後の課題としては特に選挙権等の欠格条項の緩和・廃止や低所得者に対する支援、後見人よりも対象者の自己決定権がより認められている保佐や補助の活用や一般の市民が後見人となる市民後見人の創設を進めることです。そうした制度の改善や活用、創設を進めることで今の成年後見人制度の活用をためらっている障害者や高齢者がより活用しやすくなり、より地域で暮らしやすくなると思います。

(有松)

こころとからだをすっきり！ヨガタイム

梅雨の蒸し暑さが身体にこたえるこの時期、ヨガで自分の身体と向き合ってみませんか？

ヨガの目的はきれいなポーズをとることではありません。その日の身体がどんなふうにか、動かないか、意識を自分に向ける時間です。呼吸が深くなり、肩こり、腰痛、疲労感も和らぎます。

初めてでも、身体がかたくても、ゆっくり自分のできる範囲で行うので大丈夫！男女問わずぜひ参加してみてください♪講師は石田久美さんです。

★ヨガ：全身をうごかすヨガ

日 時：7月12日(木) 18:15-19:30 (OPEN18:00)

場 所：油小路事務所2F

持ち物：動きやすい服装・タオル・飲み物

費 用：無料

*このヨガクラスは、JCIL自立支援事業所の利用者さんと家族・介助者さんを対象にしています。



総合支援法に変わるよ！ えっ、ほんま？ Part 11

自立生活満喫中のリツコさん
でもあんまり難しい話は苦手…



障害者制度改革について
勉強中のタクオさん
小難しいこともやさしく(?)解説



そうなんや。じゃあ、正式に、「総合支援法」
に変わることが決まったんやね。

6月20日、「障害者総合支援法」が参議院本会議
で可決され、ついに正式に成立したよ。

そうなんや。内容はどうなんやろう。
なにがどう変わるん？

うん。実際に施行されるのは、来年の4月から。
一部の内容についてはさ来年の4月からだよ。

尊厳死法 (ソングンシホウ) ?

大きくは変わらないかな。いくらか変わる点があるけど、それはまた次回にしゃべらせて。ちょっと「尊厳死法」のことを伝えたくて。

え！？実際に胃ろうや人工呼吸器つけて生きてはる仲間や知り合い、たくさんいるのに、そなん、あかんやん。

うん。胃ろうや人工呼吸器をつけて生きるより、死んだ方がまし(それを尊厳死という)、という世間の差別意識を容認して、それを法律で認める法律。

「終末期」ってどんな状態なの？
生命保険もおおりるって…

うん。詳しく言うと、事前にね、「終末期」になったら胃ろうや人工呼吸器つけないで、と言っておいて、実際に二人以上のお医者さんによって、「終末期」と判断されたら、そのまま治療停止されちゃう。治療停止したお医者さんも責任は問われない。そして、生命保険もおおりる。

ほんまやわ。うちらは、どんな状態やっても「生きる」ことを肯定していかな。心身に重度の障害をもつたくさんの仲間が、「生きてはる」。

「終末期」といってもお医者さん次第でけっこう勝手に判断されやすいよ。生命保険のことまで書くなんていやらしい。

ほんまや～！そんな法律がもう通るん？

そうだよ。確かに医療や介護が不足していたら、実際に生きていくのは大変。だから、死ね、ではなく、医療や介護をもっと整えていかないと！

まだ決まってない。けど、国会が大幅に会期延長されて、この法律をどさくさまぎれで通したいという人たちがいるんだ。要注意だよ。

被災地に行ってきました！《番外編》

3月末～4月のはじめに、日本自立生活センターより矢吹さん、介助者の黒田さん、石塚さん、京都でてこいランドの松井さんの4名が岩手県の「被災地障がい者センターみやこ」を訪ねられました。

東日本大震災から1年。今回の訪問で感じたことを綴ってもらいました。

2011年3月11日の東日本災害は、わが国にさまざまな変化をもたらしました。もちろん、私ができるのは、ニュースやメールで知るだけの狭い範囲のことであり、被災地の状況から国内・国外に及ぼす影響の全体を把握することはできるはずありませんが、私を感じた部分を記すことといたします。

まず、被災された多くの皆さんに共通した言葉や思いがあります。

「これまで（被災する前）の生活、ごく平凡な当たり前のものだと思っていた日常の生活が、実はとても幸せなものであったのだと気づきました」「家族や地域の人たちとのつながりが非常に大切なものであることを改めて感じた。」などの、ごくごく素朴な思いがありました。

また、マスコミを通じて「絆」という言葉が必要以上に使われ、何か意図的で威圧感を感じてしまうような強制力がありました。これは、コンピュータや携帯電話、大型ショッピングセンター、コンビニエンスストア、一人に1台のテレビ、核家族化などの社会現象の中で、良い面でも悪い面でも繋がっていた絆というものがどんどん断ち切られてきた結果への反省と修正だと思いますが、今さら急に絆を取り戻せと言うのは、極めて困難なことです。現に、放射能の拡散などで、福島の人たちの絆はめちゃくちゃに断ち切られてきたのですから、「繋がることの大切さや良い面」というものをはっきり自覚していかなければならないと思います。

一方では、新しいつながりが全国的に広がっています。



↑三陸鉄道田野畑駅の開通イベント

私たち日本自立生活センターのスタッフも、街頭募金活動や現地（岩手、宮城、福島）訪問、個人の力で応援する人たち、各種イベントの参加などで、これまで全く会うことの無かった人たちとの出会いが次々と広がっています。これは、長い間の習慣だけで付き合うしがらみの付き合いではなく、お互いがお互いを選んだり選ばれたりしながらの比較的ゆるやかな自由な付き合いの中で、新しい生き方を見つけて行けるものとなるのかも知れません。

「幸せってなんだろうか」「おたがい様って何？」「親切や思いやりって何？」「支援するってどんなこと？」「贅沢って何？」「節約って何？」……など、日常・非日常のことも含めて、これほど多くの人たちが一緒に考えたきっかけは今までになかったのだらうと思います。

素晴らしい生き方をする人たちとの新たな出会いやこれまでの人間関係をさらに深めていくためにも、災害で亡くなられた方々の犠牲を無駄にすることなく、みんなの自立を真剣に考えていきましょう。合掌

（日本自立生活センター所長 矢吹文敏）



↑美しい浄土ヶ浜の風景

仮設住宅で遊ぶ子どもたち

